

# (続) 沖縄県うるま市津堅方言の条件表現について

—*-riba*形と*-ine*形の形態論的記述と条件表現に関する言語資料—

又 吉 里 美

## 1. はじめに

本稿では、又吉（2016）に引き続き、沖縄県うるま市津堅方言の条件表現について記述する。また、方言文法研究会（2010）『全国方言文法辞典』のための条件表現・逆接表現調査ガイドブック』に提示されている調査項目についての調査データを言語資料として示す。なお、(01)～(57)の調査項目についての、調査で得られたデータは、又吉（2016）に示している。本稿では、(58)～(79)の調査項目「非従属節用法」について、調査で得られたデータを提示する。

## 2. 津堅方言の条件形の構造

津堅方言の動詞パラダイムにおける条件形を再掲しておく。津堅方言の条件形は、*-riba*形と*-ine*形の2つの形態を有する。基本構造については、下記の表1に示すとおりである。

両形の構造は、*-riba*形が「基本語幹-*iba*」、*-ine*形が「連用語幹-*ine*」となり、接続する語幹の違いがある。また、*-riba*形は、基本語幹に接続させる場合、*r*音を脱落させる。具体的に見てみると、*jumuN*（読む）の基本語幹*jum-*に*-riba*をそのまま接続させると、*jumriba*となり、子音連続になる。津堅方言の音構造は日本語と同様にCV構造を基本とする。したがって、子音連続を避けるために*r*音を脱落させて-*iba*の形で接続させることになる。

また、否定形は両形ともに文末終止の否定形でもある形に接辞-*riba*、*-ine*を接続させる。たとえば、*jumuN*の否定形は*jumaN*であり、その*jumaN*という形態に-*riba*を接続させて*jumaNriba*とする。ただし、*-ine*形では音声変化を生じさせる。*-ine*形は、否定形接辞-*aN*の*N*を脱落させた形態に-*ine*を接続させる。*jumuN*の否定形*jumaN*に-*ine*を接続させる場合、*jumaN*の語末音*N*を脱落させて-*ine*を接続させて*jumaine*とする。

表 1 動詞活用タイプと条件形の構造

		強変化動詞A <i>jumuN</i> (読む)	強変化動詞B <i>kaNzjuN</i> (かぶる)	混合変化動詞A <i>ukiN</i> (起きる)	混合変化動詞B <i>uwaiN</i> (終わる)
条件形 1	肯定	<i>jum-iba</i> 基本-CONDb	<i>kaNr-iba</i> 基本- <i>iba</i>	<i>ukir-iba</i> 基本- <i>iba</i>	<i>uwar-iba</i> 基本-CONDb
	否定	<i>jum-aN-riba</i> 基本-NEG-CONDb	<i>kaNr-aN-riba</i> 基本-NEG-CONDb	<i>ukir-aN-riba</i> 基本-NEG-CONDb	<i>uwar-aN-riba</i> 基本-NEG-CONDb
条件形 2	肯定	<i>jum-ine</i> 連用-CONDn	<i>kaNz-ine</i> 連用-CONDn	<i>uki-ine</i> 連用-CONDn	<i>uwa-ine</i> 連用-CONDn
	否定	<i>jum-a-ine</i> 基本-NEG-CONDn	<i>kaNr-a-ine</i> 基本-NEG-CONDn	<i>ukir-a-ine</i> 基本-NEG-CONDn	<i>uwar-a-ine</i> 基本-NEG-CONDn

※表中の基本 = 基本語幹、連用 = 連用語幹である。

### 3. 津堅方言の条件表現に関する言語資料—グロス付き資料—

本稿では、方言文法研究会編 (2010b) に掲載されている調査票を用いて行った調査\*<sup>1</sup> のデータの一部\*<sup>2</sup>を言語資料として示す。資料は、方言文例と文法情報であるグロスを中心に提示し、調査文例と大きく異なる文にのみ訳を加えた。資料中の条件表現の形態の多くは-*riba*形、-*ine*形である。-*riba*形と-*iba*形は相互に入れ替えが可能で機能は非常に類似しているが、全ての項目において入れ替えが可能というわけではない。また、一部、原因・理由表現に関わる形態が見られ、条件表現と原因・理由表現との関係性をうかがわせるものがある。

以下、調査票の番号、項目名や調査観点などを調査票の表示のままに掲げて、調査データを提示する。調査文例と異なる調査データの場合は、noteとして、直訳を記しておく。なお、調査文例の後の「\*」は調査の優先度の低い項目であることを示す記号である。

#### 2. 非従属節用法

##### 2-1 助動詞的用法

(58) もっと早く起きればよかった。(反事実的・後悔) <GAJ078>

*naa ihwi-gwa hee-ku ukir-iba sim-u-ta=muN*  
 もう 少し-DIM 早く-INF 起きる-CONDb すむ-NPST-PST=SFP  
*naa ihwi-gwa hee-ku uki-ine sim-u-ta=muN*  
 もう 少し-DIM 早く-INF 起きる-CONDn すむ-NPST-PST=SFP  
 [note:直訳は「もう少し早く起きればよかったのに。」である。]

(59) あんなところに行かなければよかった。

(反事実的・後悔・動詞否定述語) <GAJ185>

*aNcuru uma=si ik-aN-riba sim-u-ta=muN. naa*  
 あのような ところ=ALL 行く-NEG-CONDb すむ-NPST-PST=SFP DSC  
*aNcuru uma=si ik-aN-ta-riba sim-u-ta=muN. naa*  
 あのような ところ=ALL 行く-NEG-PST-CONDb すむ-NPST-PST=SFP DSC  
 {note:直訳は「あのようなところに行かなかったらよかったのに。」である。}

(60) もっと安ければいいのに。(反事実的・不満・形容詞述語)

*naa ihwee jas-sa-riba sim-u-ta=muN.*  
 もう 少し 安い-ADJ-CONDb すむ-NPST-PST=SFP  
*naa ihwee jas-sa-ine sim-u-ta=muN.*  
 もう 少し 安い-ADJ-CONDn すむ-NPST-PST=SFP  
 {note:直訳は「もう少し安ければよかったのに。」である。}

(61) やせたいなら、食べなければいいじゃないか。(必要十分)

*joogari+busa-riba ka-aN-riba sim-i=ru hu-u-ru.*  
 やせる+欲しい-CONDb 食べる-NEG-CONDb すむ-SEQ1=FOC する-NPST-ADN  
 {note:直訳は「やせたいなら食べなければすむだろう(=いいだろう)。」である。}

(62) どうすればいいかわからない。(困惑)

*isaa hi-iba sim-u-gara wakar-aN*  
 どう する-CONDb すむ-NPST-Q 分かる-NEG  
*isaa hi-ine sim-u-gara akar-aN*  
 どう する-CONDn すむ-NPST-Q 分かる-NEG

(63) [体の弱い友だちに勧める]あの温泉に行くといいよ。(勧め)〈preGAJ037〉

*ari oNseN=si ik-iba masi ja-N=ro*  
 あの 温泉=ALL 行く-CONDb まし COP-IND1=SFP  
*ari oNseN=si ik-ine masi ja-N=ro*  
 あの 温泉=ALL 行く-CONDn まし COP-IND1=SFP  
*ari oNseN=si ik-u=je masi ja-N=ro*  
 あの 温泉=ALL 行く-NPST=TOP まし COP-IND1=SFP

(64) 明日晴れ れば／ると いいなあ。(願望)

*asa jii tiNki=φ nar-iba sim-u-iga=ja*  
 明日 いい 天気=DAT なる-CONDb すむ-NPST-ADVRS=SFP  
*asa jii tiNki=φ na-ine sim-u-iga=ja*

明日 いい 天気=DAT なる-CONDn すむ-NPST-ADVRS=SFP  
 [note:直訳は「明日いい天気になればいいけどね。」である。]

(65) 私はあした役場に行かなければならない。(義務) <GAJ154改>

<i>wanu</i>	<i>asa</i>	<i>jakuba=si</i>	<i>ik-aN-riba</i>	<i>nar-aN</i>
私.TOP	明日	役場=ALL	行く-NEG-CONDb	なる-NEG
<i>wanu</i>	<i>asa</i>	<i>jakuba=si</i>	<i>ik-a-ine</i>	<i>nar-aN</i>
私.TOP	明日	役場=ALL	行く-NEG-CONDn	なる-NEG
<i>wanu</i>	<i>asa</i>	<i>jakuba=si</i>	<i>ik-i-ba=ru</i>	<i>ja-ru</i>
私.TOP	明日	役場=ALL	行く-NPST-TOP=FOC* <sup>3</sup>	COP-ADN

[note:*ik-i-ba=ru ja-ru*は、*ikibaruru*となることがある。また、*ik-i-ba=ru ja-ru*の方が義務感が強く、猶予なく何が何でも明日行かなければいけないという状況のときに使用されるが、*ik-aN-riba nar-aN*、*ik-a-ine nar-aN*は、必ず明日というわけではないが、明日行くことにしているというような状況において使用するという話者の内省による説明を得た。]

(66) そっちへ行ってはいけない。(禁止) <GAJ153>

<i>uma=si</i>	<i>Nzje</i>	<i>nar-aN=ro</i>
そこ=ALL	行く.TOP	なる-NEG=SFP

(67) ここで煙草を吸ってはダメだ。\* (禁止)

<i>uma=Nzje</i>	<i>tabaku=φ</i>	<i>pusje</i>	<i>nar-aN</i>
ここ=LOCz.TOP	煙草=ACC	吸う.TOP	なる-NEG

## 2-2終助詞的用法

(68) [お菓子をすすめて] こっちのも食べたら。(勧め)

<i>uma=nu</i>	<i>muN</i>	<i>ka-aN=ga</i>
こちら=GEN	もの.ADD	食べる-NEG=Q

(69) やりたいなら勝手にやれば。(突き放し)

<i>hii+busa-riba</i>	<i>ruu=nu</i>	<i>katti=si</i>	<i>haN=ga</i>
する+欲しい-CONDb	自分=GEN	勝手にINST	する-NEG=Q
[note:直訳は「やりたいなら自分の勝手にしないか。」である。]			
<i>hii+busa-riba</i>	<i>ruu=nu</i>	<i>katti=si</i>	<i>hi-iba</i> <i>sim-u-wa</i>
する+欲しい-CONDb	自分=GEN	勝手にINST	する-CONDb      すむ-NPST-IND3
<i>hii+busa-riba</i>	<i>ruu=nu</i>	<i>katti=si</i>	<i>hi-ine</i> <i>sim-u-wa</i>
する+欲しい-CONDb	自分=GEN	勝手にINST	する-CONDn      すむ-NPST-IND3

{note:直訳は「やりたいなら自分の勝手ですればいいよ。」である。}

(70) [リモコンの置き場所をなかなか覚えない相手に]

何度言ったらわかるの。ここにあるってば。\* (再確認の要求・叙述)

<i>ikukee</i>	<i>i-si-N</i>	<i>wakar-aN=ba.</i>	<i>une</i>	<i>uma=Nka</i>	<i>aa-ha</i>
何回	言う-SEQ-ADVRS	分かる-NEG=SFP	ほら	ここ=LOCK	ある-IND2
<i>ikukee</i>	<i>i-si-N</i>	<i>wakar-aN=ba.</i>	<i>une</i>	<i>uma=Nka</i>	<i>aa-hje</i>
何回	言う-SEQ-ADVRS	分かる-NEG=SFP	ほら	ここ=LOCK	ある-IND

(71) [一度止めたのにそれでも行こうとする子どもに]

そっちへは行くなったら。\* (再確認の要求・禁止)

<i>jee</i>	<i>amasjee</i>	<i>ik-una=be</i>
DSC	あそこ.TOP	行く-PROH=SFP
{note: 次の <i>ikunajo</i> よりも <i>be</i> を使った <i>ikunabe</i> の方がニュアンスとしては強い。}		
<i>jee</i>	<i>amasjee</i>	<i>ik-una=jo</i>
DSC	あそこ.TOP	行く-PROH=SFP
<i>jee</i>	<i>amasjee</i>	<i>ik-aN=ro</i>
DSC	あそこ.TOP	行く-NEG=SFP

{note:直訳は「イエ、あそこへ行かないよ。」である。}

### 2-3接続詞的用法

(72) この道をまっすぐに行け。そうすれば、郵便局があるから。(従属節的)

<i>uri</i>	<i>misi=φ</i>	<i>massugu</i>	<i>ik-i=be.</i>		
この	道=ACC	まっすぐ	行-IMP=SFP		
<i>ainee</i>		<i>juubiNkjoku=ga</i>	<i>aa=gutu.</i>		
そうすれば		郵便局=NOM	ある=SFP		
<i>uri</i>	<i>misi=φ</i>	<i>massugu</i>	<i>ik-iba</i>	<i>juubiNkjoku=ga</i>	<i>aa=gutu</i>
この	道=ACC	まっすぐ	行く-CONDb	郵便局=NOM	ある=SFP
<i>uri</i>	<i>misi=φ</i>	<i>massugu</i>	<i>ik-ine</i>	<i>juubiNkjoku=ga</i>	<i>aa=gutu</i>
この	道=ACC	まっすぐ	行く-CONDn	郵便局=NOM	ある=SFP

{note:直訳は「この道をまっすぐ行けば郵便局があるから。」である。}

(73) A 「私は昭和元年生まれだ。」

B 「そうすると、私より五つ上だね。」(解釈・推論)

A	<i>wanu</i>	<i>sjoowa</i>	<i>gaNneN</i>	<i>umari=ru</i>	<i>ja-ru</i>
	私.TOP	昭和	元年	生まれ=FOC	COP-ADN

B *ainee*            *waN=juka*    *isicee*        *ji*        *ja-haa*  
 それならば    私=CMP        五つ.TOP      上        COP-IND2

B *aNjariba*        *waN=juka*    *isicee*        *ji*        *ja-haa*  
 それならば    私=CMP        五つ.TOP      上        COP-IND2

B *aaba*            *waN=juka*    *isicee*        *ji*        *ja-haa*  
 DSC            私=CMP        五つ.TOP      上        COP-IND2

{note:*aaba*は、感動詞として位置付けられ、(74)のように用いられる。}

(74) A 「これ使うなら持って行っていいよ。」

B 「じゃあ、悪いけどちょっと借りるね。」(態度表明)

A *uri*    *sika-u-ru*        *muN*    *jar-iba*        *mucci+Nzi*    *sim-u-N=ro*  
 これ    使う-NPST-ADN    もの    COP-CONDb    持つて+行って    すむ-NPST-IND1=SFP

B *aaba*        *was-sa-iga*                    *ihwi-gwa*        *kar-a=ii*  
 DSC        悪い-ADJ-ADVRS            少し-DIM        借りる-INT =SFP

B *daaba*        *was-sa-iga*                    *ihwi-gwa*        *kar-a=ii*  
 DSC        悪い-ADJ-ADVRS            少し-DIM        借りる-INT =SFP

(75) [会合の始まりに] では、始めます。(転換)

*hai*            *nama=kara*        *pazimir-a*  
 DSC            今=ABL            始める-IMT

*Nda*            *nama=kara*        *pazimir-a*  
 DSC            今=ABL            始める-IMT

*Ndaba*        *nama=kara*        *pazimir-a*  
 DSC            今=ABL            始める-IMT

*daabada*      *namakara*        *pazimir-a*  
 DSC            今=ABL            始める-IMT

(76) [別れのあいさつで] では、さようなら。(転換)

*mata*            *asa=jaa.*  
 また            明日=SFP

*mata=jaa*        *naa.*  
 明日=SFP        DSC

(77) 約束は明日だった？ じゃあ、私は間違っていた。今日だと思っていた。  
(推論)

*surii=ja asa=ru ja-ta=gaja.*  
集まり=TOP 明日=FOC COP-PST=Q

*aaba waN=ga=ru masiga-tu-ta-ru. suu=ci=ru umu-ta-ru.*  
DSC 私=NOM=FOC 間違える-PROG-PST-ADN. 今日=QUOT=FOC 思う-PST-ADN

(78) 6時に着いた。そうしたら、もう会は終わっていた。(事實的)

*rokuzi=ni sisan. aNsagutu surii=ja uwa-tu-ta-N*  
6時=TIM 着く.PST そうすると 集まり=TOP 終わる=PROG-PST-IND1  
[note:直訳は「6時に着いた。そうすると、集まりは終わっていた。」である。]

*rokuzi=ni sisa-gutu naa surii=ja uwa-tu-ta-N*  
六時=TIM 着く.CSLg もう 集まり=TOP 終わる-PROG-PST-IND1  
[note:直訳は「6時に着いたから、もう集まりは終わっていた。」である。]

(79) もしかしたら、あいつは来ないかもしれない。\*

*musikahiinee taroo=ja kuN-ra-hazi=ro.*  
もしかすると 太郎=TOP 来る.NEG-ADN=SUPP=SFP  
*taroo=ja isaagajagara kuN-ra-hazi=ro.*  
太郎=TOP どうだろうか 来る.NEG-ADN=SUPP=SFP

#### 4. 今後の課題—事実条件文（偶然確定条件）の観点から

前稿から引き続き、条件表現の形態および、その使用例を調査項目のデータを示す形で提示してきた。津堅方言の条件形は、*-riba*形と*-ine*形の2つの形態を中心とし、だいたいにおいて両形の入替えが可能であることが多いことも指摘できる。一方で、*-riba*形も*-ine*形も使用できず、*-gutu*形が用いられる項目がある。それらはいわゆる事実条件文と言われるものである。ここでは、事実条件文の概略を整理するとともに、方言における事実条件文に関する扱いや条件表現の研究課題について述べておく。

まず、事実条件文の概略として、日本語文法記述研究会（2008）では、事実条件文の意味と用法は以下のように述べられている。

条件文が、過去に1回の事態が成立したことを意味する場合がある。  
このような条件文を事実条件文という。

- ・ 箱を開けたら、中にハンカチが入っていた。
- ・ ボタンを押すと、お釣りが出てきた。

このような事実条件は「たら」「と」によって表される。

共通語の場合、事実条件文では、「たら」「と」が中心的に用いられる。事実条件文における「たら」は日本語史的に見た場合、小林 (1996) において、次のような指摘が見られる。事実条件文 (偶然確定) の「たら」は、近世中期頃から見られる。その形態は、「タレバ」が「タリヤ」と音変化したのち、仮定条件の形式として存在していた「たら」(「タラバ」の「バ」が脱落した形態) の影響を受け、「たら」に合流する形で成立したとされている。すなわち、事実条件文における「たら」の成立は近世期と比較的時代が下った時期であり、仮定条件の「たら」とはその成立過程が異なるとまとめられる。

ところで、全国諸方言における事実条件文の文法形式について見てみると、大西編 (2016) では次のような記述が見える。

全国的に「イッタラ」\*<sup>4</sup>が広がっている。一方、東北地方には「イッタツケ」、九州南西部を中心に「イッタレバ」、沖縄本島に「ンジャクトゥ」が分布する。これらの形式は、他の仮定条件文・反事実的条件文の項目では、全く、あるいはほとんど使われておらず、事実的条件文専用の形式と見られる。

[大西拓一郎編 (2016) : 200]

津堅方言における事実条件文の項目を再掲すれば、次のとおりである。

(40) 犬にえさをやったら、喜んで食べた。\* (きっかけ)

*iN=ni muN ki-ta-gutu iso-zi kwo-ta-N*

犬=DAT モノ=ACC やる-PST-CSLg 喜ぶ-SEQ2 食べる-NPST-PST-IND1

[note:上記の場合、「経験・体験して初めて分かったこと」として表される。一方、-*riba*形や-*ine*形を使うと、*iN=ni muN=φ kir-iba /ki-ine isog-u-N=tee*「犬にえさをやると喜ぶよ」と、犬にえさをやると喜ぶということが分かっている場合に用いられる。]

(41) [眠れないと思ったけれど] 布団に入ったら、すぐ寝てしまった。\* (連続)

*hutoN=si icca-gutu sugu niN-ti+Nzj-u-N*

布団=ALL 入る.PST-CSLg すぐ 寝る-SEQ2+行く-NPST-IND1

(78) 6時に着いた。そうしたら、もう会は終わっていた。(事實的)

*rokuzi=ni sisa-gutu naa surii=ja uwa-tu-ta-N*

六時=TIM 着く.CSLg もう 集まり=TOP 終わる-PROG-PST-IND1



[note:直訳は「6時に着いたから、もう集まりは終わっていた。」である。]

これらの-gutu形は事実条件文におけるいわゆる「きっかけ」を表すものである。ところで、-gutu形は、沖縄本島の諸方言において、「原因理由」を表すときに用いられるのが一般的で、津堅方言でも次のように用いられる。

ami=nu      pu-tu-gutu      ik-una=be  
雨=NOM      降る-PROG-CSLg      行く-PROH=SFP  
[note:直訳は「雨が降っているから行くな。」である。]

-gutu形は、事実条件文における「きっかけ」と「原因理由」を表すと考えられるが、「きっかけ」と「原因理由」との関連性はどうか捉えるべきであろうか。このことについて、奥田は次のように述べる。

《確定条件》とか《仮定条件》とかいう用語もわるくはないが、ここでは、わずらわしさをさけて、ヨーロッパ語の文法の伝統的な用語に直訳風にしたがうことにする。そうであれば、ここでの《原因》という用語は、／事実的な根拠／というふうに、ひろく理解しておかなければならない。じっさい、日常的な意識においては、原因も条件も、きっかけも動機も、みんな原因になってしまう。…中略…きっかけも根拠のうちのひとつであるが、原因とはちがう。原因を原因として発動させる出来事なのである。あるいは、ある物にその機能をさそい出す出来事である。

[奥田靖雄著作集刊行委員会 (2015) : 62]

「すると」をつきそい文の述語にするあわせ文では、ふたつの出来事のあいだのむすびつきが、継起的な現象として経験にあたえられている。ところが、つきそい文が「するので」を述語に採用すれば、おおくのばあいそこには継起性がかけているために、そのむすびつきがむしろ思考によって間接的にとらえられていて、つきそい文にさしだされる出来事が、いいおわり文にさしだされる出来事の成立を条件づけているという、はなし手の意識がつよくまえにおしだされてくる。「すると」が《きっかけ》にかぎって条件づけの関係を表現しているとするれば、「するので」は原因も条件もきっかけも、根拠のすべてを表現する。

[奥田靖雄著作集刊行委員会 (2015) : 63]

これらの指摘を踏まえれば、「きっかけ」(継起性)は出来事や経験を土台とし、「原因理由」は論理関係をとらえる思考を土台とするものであると言

えよう。そして、共通語の場合、「-と」は、継起性により特化した形態として捉えられ、「-たら」は仮定条件を中心的な機能としながらも日本語史的な成立過程を背景として継起性を獲得した形態であるといえる。一方、津堅方言をはじめとする沖縄本島の多くの諸方言の-gutu形は共通語の「-と」に代表される「きっかけ」と「-ので」に代表される「原因理由」の両機能を持ち広く捉えるところの「事実的な根拠」を示す文法形態だと言える。

以上、事実条件文に用いられる-gutu形について、原因理由を表す機能との関連性について整理したが、次のような課題が考えられる。-gutu形は形式名詞の「コト」に由来するが、「コト」が「事実的な根拠」として「きっかけ」や「原因理由」を表すようになった機能はどのように成立したのか。また、「きっかけ」(事実条件文)を表すものとして-fjika:形(宮古保良方言)などティカー形が南琉球で見られるが、その語構成は不明とされている\*<sup>5</sup>。琉球諸方言全体において、条件文の記述やその体系の整理は十分とは言えない状況である。条件、原因、理由といった認識とその表現との関係の整理とともに、形態、機能、用法についてさらに記述、整理を進める必要がある。

## 参考引用文献

- Michinori Shimoji, Thomas Pellard (ed) (2010) *An introduction to Ryukyuan Languages*, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa Tokyo University of Foreign Studies
- 有田節子編 (2017) 『日本語条件文の諸相－地理的変異と歴史の変遷』 くろしお出版
- 大西拓一郎編 (2016) 『新日本言語地図－分布図で見渡す方言の世界－』 朝倉書店
- 奥田靖雄著作集刊行委員会 (2015) 『奥田靖雄著作集 2 言語学編 (1)』 むぎ書房
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一 編著 (1997) 『日本列島の言語』 三省堂
- 狩俣繁久 (2007) 「宮古保良方言の条件形」 『南島文化』 第29号、pp.41-62
- 国立国語研究所 (2001) 『沖縄語辞典』 財務省印刷局
- 小林賢次 (1996) 『日本語条件表現史の研究』 ひつじ書房
- 中島悦子 (2007) 『条件表現の研究』 おうふう
- 中本正智 (1990) 『日本列島 言語史の研究』 大修館書店
- 日本語記述文法研究会 (2008) 『現代日本語文法 6 第11部 複文』 くろしお出版
- ハイス・ファン・デル・ルベ (2015) 「琉球沖永良部語正名方言の条件文」 『国際琉球沖縄論集』 第4号、pp.61-77
- 方言文法研究会編 (2010a) 『全国方言文法辞典資料集 (1) 原因・理由表現』 (10)

方言文法研究会編 (2010b) 『『全国方言文法辞典』のための条件表現・逆接表現調査ガイドブック』

益岡隆志 (1993) 『日本語の条件表現』 くろしお出版

又吉里美 (2016) 「沖縄県うるま市津堅方言の条件表現について -*-riiba*形と -*-ine*形の形態論的記述と条件表現に関する言語資料 -」 『岡山大学国語研究』 第30号、pp.60-75

又吉里美 (2015) 「津堅方言の動詞の記述—動詞の形態とテンス・アスペクト—」 『琉球の方言』 pp.117-140

\*<sup>1</sup> インフォーマントは津堅島出身のO.T. (S3生、女性)、戦後、沖縄市へ移住している。調査は2015年7月～11月にかけておこなった。

\*<sup>2</sup> 調査票は大きく2つの観点に分かれている。1.従属節用法、2.非従属節用法である。調査項目は、全部で79項目あるが、本稿で示すデータは、後半の2.非従属節用法の (58)～(79) の調査データである。1.従属節用法の項目の調査データは又吉 (2016) にまとめている。

\*<sup>3</sup> 中本正智 (1990、P.525) において次の分析が見える。「(10) *bingata dʒin ʃiru wadu ɕikitaʃuru*. (紅型の着物を着れば引き立つ)」に見える *ʃiru wadu* は、キレに助詞 *バズ* にあたる *wadu* がついた形であり、条件を表す、という。これにならえば、*ikibaruru baru* の部分は *wadu* と同様の構造で、助詞 *バズ* を元とするものと考えられる。

\*<sup>4</sup> 「そこに行ったらもう会は終わっていた」と言うとき、「そこに行ったら」のところをどのように言いますか、という質問文に対する回答である。

\*<sup>5</sup> 狩俣 繁久 (2007)、P.42

## グロス一覧

ACC	accusative	対格	INF	infinitive	限定用法の形容詞
ABL	ablative	奪格	INT	intentional	意志
ADD	additive	添加	LMT	limitative	限定
ADJ	adjectivizer	形容詞化	LOCK	locative	場所格 <i>Nka</i> 形
ADN	adnominal	連体/名詞化	LOCz	locative	場所格 <i>Nzi</i> 形
ADVRS	adversative	逆接	NEG	negative	否定
ALL	allative	向格	NOM	nominative	主格
CONDb	conditional	条件 <i>riiba</i> 形	NPST	non past	非過去
CONDn	conditional	条件 <i>ine</i> 形	POT	potential	可能
COP	copula	コピュラ	PROG	progressive	進行
CSLg	causa 1	理由 <i>gutu</i> 形	PROH	prohibition	禁止
CSLk	causa 1	理由 <i>kara</i> 形	PST	past	過去
CSLm	causa 1	理由 <i>muN</i> 形	PURP	purposive	目的

DAT	dative	与格	Q	question particle/ marker	疑問
DIM	diminutive	指小辞			
DSC	discourse marker	談話標識	QUOT	quotative	引用
FOC	focus	焦点	REC	recitation	列举
GEN	genitive	属格	SEQ1	sequential converb	中止形 1
IMP	imperative	命令	SEQ2	sequential converb	中止形 2 = テ形
IND1	indicative	いわゆる終止形N形	SFP	sentence-final particle	終助詞
IND2	indicative	いわゆる終止形ha形	SUPP	suppositional	推定
IND3	indicative	いわゆる終止形wa形	TOP	topic	主題

## 付記

本稿は、2012年度～2015年度基盤研究（A）（課題番号24242014）「消滅危機言語としての琉球諸語・八丈語の文法記述に関する基礎的研究」の研究成果の一部です。

（本学研究科・学部 教員）